

1965年9月（掲載誌不明\*）

## 機械に教育させる法

全国プログラム学習研究委員長 矢口 新

機械は人を教えられるかどうか。こういう問を出すと、人間を教育するのは人間でなくてはならない、機械が人を教えるなどということを考えるのは以ての外、という人がいる。

人間が人間を教育するという事は間違いないことであろう。しかしそれは、ただなんとなく教育者に期待するという事であってはならない。「教師よ、がんばれ」というだけでは、教育を本物にすることではないであろう。

自然は人間を教育するという言葉がある。これはなかなか意味の深い言葉である。自然は人間の如く意志をもって行動するのではない。中世時代には自然は神の意志のあらわれと考えたこともあったが、現代ではそうは考えない。自然は自然として法則をもつ存在と考える。だから自然が人間を教育するというのは、いわば比喩的な言い方である。人間の方が、自然からなんらかの意味をひき出すことをいうのである。それで人間が自分でかわって行くのである。人間はつまり自分で自分を教育するのである。この場合に教育者はいない。つまり人間の自己教育だといってよいであろう。

無為にして化すという言葉がある。これは人の師として人格が絶大なもののことをいったものである。その表現が、無為というのは意味深い表現である。この場合無為とは何をいうのであろうか。師の側からいえば無為かもしれないが、弟子の方からいえば、あくまで師から吸収しようという関係が成り立っていることであろう。この場合も、自己教育、自己学習ということが、大きい

意味をもっていると思われる。

自己教育ということについて考えてみよう。自己教育こそ教育の本質をいっているのではないか。学ぶ者が、働かなければ、教育されるということは成り立ち得ない。馬の耳に念仏ということがあるがいくらよいことでも受けとる者、学ぶ者が働かないのでは教育にはならない。

近代語では、このことを生徒のレスポンスなどという。生徒が反応しなくては、いくら外側から教育をしても、教育にならないということである。人間を教育するのは人間だといって、もし教師がただ、がむしゃらに一生懸命働くことだ、というような単純な考え方で教育をしようとしても、むだであろう。

人間を育てるものには、さまざまなものがある。機械だって、人間を立派に育てられるのである。ただし、そこに人間のレスポンスがあればである。

これまでの教育が、とかく生徒のレスポンスを度外視して、教えるばかり、お説教するばかり考えていすぎたことを反省しなくてはならぬ。そのお説教を機械を使って流しているのでは、これは人間のお説教以下である。

機械を使うことは、人間のレスポンスをより活発にすることにある。教師一人対五十人という一斉教授で、教師が大わらわになってしゃべっているのは教育にならない。生徒を働かすために、あらゆる道具機械が使われなくてはならない。生徒に積極的な反応を求める機械の使用ということを考えなくてはなるまい。

\*本人のメモに National A.College のメモあり。